

「ききよの季節」

江連泰知

あらすじ

主人公であり獣医師の守岡秀一は、かつて所属していた会社でハラスメントを受けた際、祖父・栄次郎に心を救われた経緯がある。この件から守岡は栄次郎を深く敬愛しており、栄次郎の「再びニホンカワウソと泳ぎたい」という夢を叶えるため、細胞からこの絶滅種を再生させようとしていた。

だが、守岡が本種の細胞を入手した矢先に栄次郎が亡くなってしまった。

守岡は秘書の後藤智雄を伴い、葬儀のために帰省するが、そこでは従弟・曾我邦明が遺産の山にソーラーパネルを設置し、それにより国から得られる補助金で一族所有の牧場を立て直そうとしていた。これによる自然破壊を危惧した守岡は、栄次郎が愛した山を守ることを決意する。

遺産相続会議にて、守岡は曾我と言い争うが、会議は栄次郎の妻・和子が発作を起こしたことで中断される。

会議再開までの間、後藤は曾我と話し、彼の内心に兄貴分の守岡が故郷を離れたことへの寂しさがあることを看破する。しかし、後藤が守岡に曾我の真意を伝えようとした矢先に地震が発生し、後藤は事務所で保管している細胞の無事を確認すべく東京に戻る。一方、守岡は急遽再開された会議に臨む。そこで和子は遺言書の存在を明かし、それに従って曾我に山を与える。ほぼ同時に守岡は後藤の連絡で細胞が死滅したことを知る。

失意の守岡に対し、後藤は、かつてのハラスメントに起因する守岡の人間不信がこの事態を招いたと述べる一方で、同じくハラスメントに苦しめられていた後藤を救った善性こそが守岡の本質であると指摘する。

この諫言を受け、守岡は人間不信を克服する決意をし、曾我に対して牧場に関する全責任を背負わせたことを謝罪、今後は2人で牧場と山を守りたいと主張する。曾我は敬愛する兄貴分の帰還を悟り、涙する。

3年後、曾我家の牧場は地元大学の研究牧場となっていた。守岡は今後の課題を列挙しつつも晴れやかな笑みを浮かべる。それを見た後藤もまた、守岡が善性を取り戻したことを悟って微笑むのであった。

登場人物

もりおかしゅういち
守岡 秀一 (26) (31) (34) 獣医
そがくにあき
曾我 邦明 (29) (32) 守岡の従弟
ごしょうともお
後藤 智雄 (26) (31) (34) 守岡の秘書
そがくにみつ
曾我 国光 (58) 守岡の伯父
そがえいじろう
曾我 栄次郎 (87) (92) 守岡の祖父
そがかずこ
曾我 和子 (84) 守岡の祖母
そがたけひこ
曾我 竹彦 (56) 守岡の伯父
そがうめこ
曾我 梅子 (52) 守岡の叔母
そがうじまつ
曾我 氏松 (50) 守岡の叔父
さのまんたろう
佐野 万太郎 (47) 牧場のスタッフ
おのでらこういち
小野 寺幸一 (28) 牧場のスタッフ
まさむらしんのすけ
牧村 伸之介 (54) 獣医
ごんだせいぞう
権田 清三 (62) 大学教授
のむらしゅんすけ
野村 俊介 (26) 大学院生
牧場スタッフ
作業員
医者

○メゾンアドベント・外観

13階建てのマンション。

天気は快晴。

○同・守岡家・居間

パジャマ姿の守岡秀一（26）が布団の中でうずくまり、論文雑誌に指を突き立てている。雑誌の表紙には中年の日本人男性が写っている。

カーテンが引かれた部屋内にはゴミが溢れ、その中にスマホが置かれている。

守岡「お前の研究じゃない！」

守岡、論文雑誌の表紙を殴りつける。

守岡「俺のだ」

スマホが鳴る。

守岡、一瞬身を震わせた後、恐る恐るゴミの中からスマホを取り出す。

守岡「爺ちゃん？」

カーテンの隙間から光が差し込む。

○牧場・全景

T・5年後。

T・宮崎県・小田井市。

近代的な設備のある肉牛牧場。

○同・牛舎・外観

大規模な近代的牛舎。

入口に「口蹄疫発生中につき立ち入り禁止」と書かれた看板がある。

守岡（31）と後藤智雄（31）が入口に向かって歩いている。

守岡はサマーコートを羽織っている。

後藤は大きな鞆を持っている。

○同・内

牛舎内には多くの肉牛が飼われている。

一部の肉牛には水疱がある。

防護服を着た牧場スタッフが水泡のある肉牛を移動させている。

防護服を着た佐野万太郎（47）と小

野寺幸一（28）が向かいあっている。

小野寺は佐野に向かって頭を何度も下げている。

佐野「ど、土砂崩れだど！」

小野寺「へい、昨日の地震で」

佐野「じゃあ獣医の先生たちは？」

小野寺「夜まで来れねえそうです」

佐野、拳を握って肉牛を見る。

佐野「今日で何頭ダメんなるってんだ」

移動中の肉牛の一匹が暴れだし、佐野の方へ走り出す。

牧場スタッフ「佐野さん、危ねえ！」

佐野と小野寺、逃げ出そうとする。

佐野は転倒して、頭を庇うように腕を出す。

守岡がサマーコートを脱ぎながら佐野の前に駆けつけ、コートで肉牛の突進をいなし佐野とは別方向へ向かわせる。
佐野と小野寺、口をポカンと開ける。
鞆を持った後藤が佐野の背後から歩い

て来て、佐野を助け起こす。

佐野「ど、どうも。あんたは？」

守岡「後藤ちゃん」

後藤、名刺を取り出して佐野に渡す。

後藤「先生に代わって、お渡しします」

佐野、名刺を手取る。

後藤、守岡からコートを受け取り鞆から白衣を取り出して守岡に着せる。

守岡「市長の依頼で参りました」

佐野と小野寺、顔を見合わせる。

○同・外（夜）

バスが牛舎の前に停まっている。

バス内から牧村伸之介（54）を含む

獣医らが降りてくる。

獣医ら、牛舎に向かっていく。

牛舎から守岡と後藤が出てくる。

牧村「もし、あなた」

守岡、牧村の脇を通り抜けていく。

後藤、牧村に会釈して守岡に続く。

牧村、首を傾げて牛舎に向かう。

○同・内（夜）

牛舎内には多くの肉牛がおり、治療の跡がある。

獣医師らに向かって佐野がお辞儀して
いる。

牧村「これをたった一人で？」

佐野「へえ」

牧村「何者ですか、その人は」

佐野「えー、確か」

佐野、ポケットから名刺を取り出す。

佐野「獣医師、守岡秀一」

牧村、唸る。

○東然大学・外観

森の中にある小さな大学。

○同・生物資源管理室・内

複数の凍結保存容器が置かれた実験室。

野村俊介（26）が青色の小型容器を片手に保存容器から凍結ストローを取り出している。

野村、歯軋りしながら小型容器にストローをしまう。

○同・応接室・内

守岡と権田清三（62）が向かい合って座っている。

後藤、守岡の背後で書類を持ってが立っている。

守岡は顕微鏡を覗いている。顕微鏡の脇に青色の小型容器が置かれている。

権田の前にはファイルが置かれている。守岡「これがニホンカワウソの生細胞ですか」

権田「ええ。絶滅種の細胞ですから」

権田、両手を強く握り合わせる。

権田「日本でも、所有者は我々しかいません」

守岡「だからこそ今回の仕事を受けたんです」
権田「こちらが資料です」

権田、ファイルに手を置く。

守岡、顕微鏡から目を離す。

権田「未公表データも入っています」

守岡「結構。後藤ちゃん」

後藤「はい」

後藤、ファイルを手に取り、書類を権田に差し出す。

後藤「契約書の写しです」

権田「はい」

守岡「本細胞の特許が私に帰属する旨が記されています」

権田、書類に皺が寄るほど強く握る。

守岡「どうしました？」

権田「いえ、ただ」

権田、目をギュッと閉じる。

権田「この研究を大切にしてください」

守岡「勿論です。ニホンカワウソは私が必ず

復活させますよ」

守岡、小型容器を持って立ち上がる。

守岡「では、失礼します。後藤ちゃん」

守岡、部屋の出口に向かう。

後藤「はい、先生」

後藤、権田を見て目を伏せ、一礼する。

守岡と後藤、部屋を出る。

権田、書類を机に叩きつけ、さらに殴りつける。

○同・駐車場・キャンピングカー・外観

白く、清潔なキャンピングカー。

○同・車内

運転席に後藤が座っている。

後部座席には守岡が座っており、守岡の前の机に青い小型容器がある。

車内には、桔梗の花が咲く中で守岡が曾我栄次郎（92）の車椅子を押している姿を撮った写真が飾られている。栄次郎の額にはケロイド状の火傷の痕がある。

守岡、小型容器を見て目を細め、深く

溜息をつく。

後藤「ようやく、手に入りましたね」

守岡、頷く。

守岡「わざわざ九州まできた甲斐があったよ」

後藤「お爺様も喜ばれるでしょうか」

守岡「ああ、きっとね」

守岡、自身と栄次郎が写った写真を見る。

○（回想）里山・全景（夕）

T・5年前。

緑豊かで桔梗の花が咲きこぼれる里山。

○（回想）同・中腹（夕）

洞窟があり、周囲には桔梗の花が咲いている。

洞窟の脇に栄次郎（87）が立っている。栄次郎の額にはケロイド状の火傷の痕がある。

守岡（26）は洞窟の脇に座って桔梗

の花をつついている。

守岡、洞窟を覗き込む。

守岡「なるほど、天然の防空壕でわけ？」

栄次郎、頷く。

栄次郎「お袋と弟たち、あと」

栄次郎、笑う。

栄次郎「カワウソどもも一緒に避難したな」

守岡、吹きだす。

守岡「カワウソ？」

栄次郎「昔はこの辺にもいたんじゃよ」

守岡、親指を側頭部にグリグリと押し

当てる。

守岡「もしかするとニホンカワウソかな」

栄次郎、守岡に向かって身を乗り出す。

栄次郎「見たことあるんか」

守岡「凶鑑でね。絶滅種だから」

栄次郎、肩を落とす。

栄次郎「そうか、あいつらもうおらんのか」

守岡「そうだね、残念だけど」

栄次郎、山肌を撫でる。

栄次郎「お前も辛かろうナア」

守岡「お前？」

栄次郎「この山じゃ」

守岡「へ、山？」

栄次郎、火傷跡を押さえる。

栄次郎「空襲からわしらを守ってくれた」

栄次郎、深く息を吸う。

栄次郎「父親みたいなものじゃ」

守岡「じゃあ俺のひい爺ちゃんだね」

栄次郎、大口を開けて笑う。

栄次郎「けどな」

守岡「ん？」

栄次郎「わしらは助かったが、村は焼けてな
んもなくなっちゃった」

守岡「ああ、そうらしいね」

栄次郎、頷く。

栄次郎「だから爺ちゃんは牧場を作って、村
を立て直したんじゃ」

守岡「独力でだろ、すごいな」

守岡、親指を側頭部にグリグリと押し

当てる。

守岡「俺には到底真似できない」

栄次郎「秀一、お前はわしの孫じゃ」

守岡、栄次郎を見る。

栄次郎「お前だって一人でも道を切り開ける」

守岡「そうかな」

栄次郎、力強く頷く。

栄次郎「お前の研究を横取りする会社なぞ辞

めたらええわい」

守岡「気軽に言ってくれる」

守岡、苦笑いする。

栄次郎、守岡の手を取る。

栄次郎「それでもだめなら帰ってこい」

栄次郎、微笑む。

守岡「うん。わかったよ、爺ちゃん」

守岡、栄次郎の手を握り返す。

○元の車内

運転席に後藤が座っている。

後部座席には守岡が座っており、守岡

の前の机には青い小型容器がある。

守岡は車内にある、自身と栄次郎が写った写真を見ている。

後藤「もう一度、ニホンカワウソと川を泳ぐ」

守岡、後藤を見る。

後藤「それがお爺様の夢だとか」

守岡「そうさ。私が」

守岡、拳を反対の手に打ち付ける。

守岡「絶対にその夢を叶えて見せる」

車の窓を叩く音が聞こえる。

守岡が車外を見ると、野村が窓を叩いている。

守岡「学生か？後藤ちゃん」

後藤、窓を開ける。

野村「考え直してください！」

守岡「いきなりなんだね」

野村「ニホンカワウソの復活は僕らの悲願なんです！」

守岡、腕を組んで野村を見る。

野村「僕たちから夢を奪わないでください！」

守岡「夢、ね」

野村「せめて、共同研究とか」

守岡「君！」

野村、口をつぐむ。

守岡「軽々しく言うことじゃあないな」

野村「えっ」

守岡「共同研究中、君達が私の成果を横取り

しない保証がどこにある」

野村「そんな！」

守岡「社会というのは出し抜き合いだからね」

野村「あなたが言うんですか！」

後藤のポケットでスマホが鳴る。後藤、

スマホを耳に当てる。

守岡「出し抜かれたくなかったら出し抜く側に
回るしかないのさ」

後藤「先生！」

守岡、後藤を見る。

後藤「お爺様が、亡くなったと」

守岡「え」

守岡、運転席に駆け寄る。

守岡「嘘だ、嘘だ！」

守岡と栄次郎の写った写真が落下する。

○農道・キャンピングカー・外観

T・栃木県・那須嘉村。

農道を走る白いキャンピングカー。

運転席に後藤、後部座席に守岡が乗っている。

○同・車内

後藤が運転する車の中。

進行方向に里山があり、その麓に牧場がある。

守岡が後部座席に乗っており、守岡は力なく座席に寄りかかっている。

守岡「後藤ちゃん」

後藤「はい、先生」

守岡、前方の里山を見る。

守岡「あれが、爺さんの山だよ」

後藤、首を振る。

後藤 「こんな形で拝見することになるとは」
守岡 「私は、爺さんに何一つ返せなかった」

後藤 「左様なことはございません」

守岡、力なく首を振る。

後藤 「先生、もうじきです」

守岡、前方の牧場を見る。

○曾我牧場・全景

緑豊かな里山の麓にある牧場。

牧場には屋敷が隣接している。

○曾我家・外観

曾我牧場と隣接している古びた屋敷。

建設会社のトラックが停まっている。

○同・玄関・外

曾我邦明（29）が、トラックの前で
作業員らと話している。

玄関先に後藤が運転するキャンピング
カーが乗りつける。

後部座席には守岡が乗っている。

曾我、車を見て眉を顰める。

後藤が車から降り、守岡の座席のドアを開けに行く。

曾我、作業員らに向かって

曾我「失礼」

曾我、車の方へ歩いていく。

守岡、車を降りて曾我を見る。

曾我、顔をしかめる。

曾我「秀一か」

守岡「邦明じゃないか、いつぶりだ？」

曾我「さあ」

守岡、作業員らを顎で指す。

守岡「あれはなんだ？」

曾我「ソーラーパネルの設置業者だ」

守岡「ソーラーパネル？」

曾我「爺ちゃんの山に設置する」

守岡「爺さんは承服してたのか？」

曾我「さあ？なんせ遺言書がないんだから」

守岡「だが爺さんの意向は」

作業員「曾我さん、すみませーん」

曾我、作業員らを見る。

曾我「すみません、今行きます」

曾我、守岡に向き直る。

曾我「取り敢えず中に入れ」

守岡「しかし」

曾我「葬式前だ。やることは山ほどある」

曾我、作業員らの方へ歩いていく。

守岡、曾我の背中を見送る。

○同・床の間・内（夜）

葬儀の飾り付けがされており、栄次郎

（92）の遺体が入った棺桶がある。

棺桶の前に曾我がおり、座ったまま眠りかけている。

桔梗の花束を持った守岡が曾我の背後にやって来る。

守岡「邦明」

曾我、半開きの目で守岡を見る。

曾我「（小声で）秀^{しゅうにい}兄？」

守岡「ん？」

曾我、首を振る。

曾我「なんでもない。なんだ？」

守岡「交代だ。仮眠でもとれ」

曾我「いや、俺が」

守岡「爺さんに話がある」

曾我、息を呑む。

曾我「そうか」

曾我、立ち上がる。

曾我「隣の部屋にいる」

守岡「ああ」

曾我、部屋を去る。

守岡、栄次郎に向き直る。

守岡「桔梗の花、山で摘んできたんだ」

守岡、花束を棺桶の上に置く。

守岡「爺ちゃん、好きだったよな」

守岡、棺桶の前に座る。

守岡「ごめん。カワウソ、間に合わなかった」

守岡、膝の上で両拳を握る。

守岡「でもきつといつかあの山にカワウソを

復活させるから、遊び来てよ」

守岡、棺桶をそっと撫でる。

守岡「それまで、山は俺が守るから」

守岡、瞬きして涙を堪える。

○曾我牧場・牛舎・外観（朝）

薄汚れた牛舎。

空には入道雲がある。

○同・外（朝）

牛舎からつなぎを着た曾我が出てくる。

車の発進音が聞こえる。

曾我が農道の方を向くと、建設会社の

トラックが走り去っていくのが見える。

曾我、農道の方へ走っていく。

○同・大広間・内（朝）

大広間の窓から里山と牧場が見える。

守岡の他、曾我竹彦（56）、曾我梅

子（52）、曾我氏松（50）を含む

喪服を着た人々が座っている。守岡の脇には後藤が控えている。

上座には曾我国光（58）とその妻および曾我和子（84）が座っている。

和子は座椅子に腰かけ、栄次郎の遺影を持っている。

国光「この度は父の葬儀への御参列、誠にありがとうございます」

国光と妻、和子、頭を下げる。

国光「早速ではございますが、遺産配分について、お話ししたく」

守岡、手を挙げる。

国光「秀一君」

守岡「失礼、ただ」

守岡、立ち上がる。

守岡「先に申し上げたいことが」

参列者ら、こそこそと話し始める。

竹彦「ありや誰だ」

梅子「ほら、姉さんの倅よ」

竹彦「都会に出た方の孫か」

氏松「遺産目当てで戻ってきたんだろう」

後藤、拳を握る。

守岡、小さく鼻を鳴らす。

守岡「遺産ですが、私には不要です」

ざわつく一同。

国光「ほ、本当に？」

守岡「ただ！」

守岡、天を指す。

守岡「一つを除いて」

国光「そら一体」

曾我の声「どうなってやがる！」

つなぎを着た曾我が入ってくる。

国光「邦明、お前、そんな恰好で」

曾我と守岡、目が合う。

曾我「秀一！」

曾我、ずかずかと守岡に近づいていく。

曾我「業者を追い返すなんて、何のつもりだ」

守岡「私の山にソーラーパネルなんぞをつけ

られてはかなわんからな」

曾我「私の山だって？」

守岡、一同に向き直る。

守岡「皆さん！」

守岡、窓の方へ歩いていく。

守岡「私がただ一つ欲しいのは」

守岡、里山を指差す。

守岡「祖父が所有していた、あの山です！」

どよめく一同。

曾我、齒を食いしぼる。

曾我「勝手なことを」

国光「秀一君」

守岡「はい」

国光「遺産の所有権はこれから決めるわけで」

守岡「だからこそです」

国光「はあ」

守岡「今時山なんぞ持っていたても二束三文」

参列者ら、唸って頷き合う。

曾我、守岡を睨む。

守岡「あの小山と引き換えに皆さんは残りの

遺産を分け合える」

国光「ふむ」

守岡「その方がスムーズですし、皆さんにも
メリットがあるでしょう」

参列者ら互いに顔を合わせる。

氏松「確かになア」

竹彦「分け前が増えるなら」

梅子「悪くないんじゃない？」

曾我、唇を噛む。

守岡「どうです、伯父さん」

国光「そうだなあ」

国光、参列者らの顔を窺う。

国光「皆様から異議がなければ」

曾我「待ってください！」

曾我、参列者らの中心に進み出る。

曾我「この人はもうよそ者だ」

守岡「よそ者って、お前」

曾我「こんな田舎の山なんてほったらかしに

するでしょう」

守岡「人を遣って管理する」

守岡、後藤に目配せする。

守岡「それで問題ないだろう」

曾我、首を振る。

曾我「ソーラーパネルを設置すれば国から補助金が出る。牧場の経営資金になります」

守岡「補助金のために自然を壊す気か？」

曾我、守岡を手で制する。

曾我「今の遺産配分の問題じゃない」

曾我、参列者らに向き直る。

曾我「我々の故郷の、これからの問題です」

守岡「おい、話を逸らすな」

曾我「よそ者の口車に乗っちゃいけない」

守岡「随分失礼な物言いだな、第一」

和子、咳きこみ始める。

守岡「よそ者というのはよさないか」

曾我「故郷を捨てた人間が今更口出すなって

言ってるんだ」

守岡「遺産相続と居住地は無関係だろう？」

和子、ますます強く咳きこむ。

国光「母さん！大丈夫ですか」

曾我「婆ちゃん」

曾我、和子に駆け寄っていく。

守岡「おい」

国光、参列者らの方へ向き直る。

国光「皆様、大変申し訳ございません」

国光、頭を下げる。

国光「ただ、ここは場を改めるということで」

守岡「いや、しかし」

氏松「しゃーねーべ」

梅子「足が痺れたわ」

竹彦「休憩じゃ休憩」

参列者ら、立ち上がる。

守岡、顔をしかめて親指を側頭部にグ

リグリと押し当てる。

○同・和子の部屋・内（朝）

和子が布団で横になっている。

その脇に医者と曾我が座っている。

医者「特段問題はありませんね」

曾我「本当ですか？」

医者「ええ」

医者、立ち上がる。

曾我「急に発作が起きたんですが」

医者「不思議ですねえ」

曾我「不思議って」

医者「ま、何かあったらすぐ呼んでください」

曾我「はあ」

医者、部屋を出ていく。

和子、薄目を開けて医者が去るのを見ている。

曾我、和子の方を見て目が合う。

和子、急いで目を閉じる。

曾我「婆ちゃん？」

曾我、和子の脇に座る。

曾我「もしかして、仮病？」

和子「ごめんねえ」

曾我「何だってそんなことを」

和子「邦ちゃん達の喧嘩を止めたくてねえ」

曾我「喧嘩じゃないよ。もっと大事な問題だ」

和子、首を振る。

和子「私には難しいことはわかんないけど」
曾我「うん」

和子、曾我の手を取る。

和子「秀ちゃんと仲良くするんだよ」

曾我「それは」

曾我、首を振る。

和子「邦ちゃん」

曾我「あいつは故郷を捨てたんだ」

和子「昔は秀兄秀兄って本当の弟みたいに」

曾我「昔の話はよしてよ」

曾我、和子の手を払う。

曾我「ごめん、でももう行くよ」

和子「ごめんねえ」

曾我、部屋を出る。

○居間・外

曾我が廊下を歩いている。

居間の中から騒ぎ声と国光の声が聞こえる。

国光「いやあ、秀一君も立派になったもんだ」

曾我、居間の扉を少しだけ開けて中を覗き見る。

○同・内

守岡と国光、氏松が酒盛りをしている。

守岡以外の2人は顔が赤い。

少し扉が開き、曾我が片目で中を見て
いる様子が見える。

守岡「祖父が援助してくれたおかげです」

氏松「そんで、都会に出ちまったわけだ」

国光「おいおい、そんな言い方は」

氏松「親父が死ぬまで帰らねんだからよ」

守岡、酒瓶を手にして強く握る。

守岡「ええ、そのことは申し訳ございません」

氏松「ほーお？」

守岡「埋め合わせと言っでは何ですが」

守岡、酒瓶を抱える。

守岡「私、多少は顔の利く大学がありました」

氏松「ほお」

守岡「私立ですが、医学部もあるんです」

氏松「何、医学部？」

守岡「娘さん、医師になりたいとか」

氏松「ああ」

守岡「素晴らしい夢です」

守岡、酒瓶を氏松の方に向ける。

守岡「進学の件、相談に乗りますよ」

氏松「相談、か」

氏松、お猪口を差し出す。

守岡「ありがとうございます」

氏松「取り敢えず、話を聞こうじゃないか」

守岡「ええ。代わりと言っては何ですが、遺

産の件はよしなに」

守岡、氏松のお猪口に酒を注ぐ。

○同・外

曾我が扉の隙間から室内を見ている。

氏松の声「いくら包めばいいのかね」

守岡の声「そうですねえ」

曾我、床に拳を打ち付ける。

○曾我牧場・牛舎・内

乳牛が多数飼育された牛舎。

曾我が大量の汗をかき、ふらつきなが

らスコップで牛糞を掃除している。

後藤が舎内に入ってくる。

曾我「畜生」

曾我、スコップを牛糞に突き刺す。スコップが引っかかり、よろめく。

曾我「お、わ、たたた」

曾我が転倒しそうになったところで、

後藤が曾我を抱きとめる。

後藤「ご無事ですか」

曾我、抱き留められたまま曾我を振り向く。

曾我「あんたは、秀一の」

後藤「秘書の後藤です。お時間頂戴しても？」

曾我「まあ、いいですけど」

後藤「ありがとうございます」

曾我「えっと、その前に」

後藤「はい、何でしょうか？」

曾我「離してもらっていいですか」

後藤「も、申し訳ございません」

後藤、曾我を離す。

○同・外

曾我と後藤がパイプ椅子に座っている。

後藤「お婆様にもお話を伺いました」

曾我「お話しって、何を？」

後藤「先生と邦明様、幼い頃は兄弟のように
仲が良かったとか」

曾我、肩をすくめる。

曾我「ガキの頃の話ですよ」

後藤「何故、朝はあのような」

曾我、後藤を睨む。

後藤「先生も強引だったとは存じますが」

曾我「今更」

曾我、深く息を吐く。

曾我「よそ者に口出しされたくないんですわ」

後藤「よそ者ですか」

曾我、立ち上がって牧草地を見る。

曾我「本当なら秀一がここを継ぐはずでした」

後藤「そう、伺っております」

曾我「あいつは、都会に逃げたんです」

後藤「邦明様は」

曾我、後藤を振り返る。

後藤「牧場を継ぎたくなかったのですか？」

曾我「そんなことは！」

曾我、俯く。

後藤「では、何故？」

曾我、牧草地を見る。

曾我「この牧場は倒産寸前です」

後藤「ええっ」

曾我「親父の世代は受け入れてますけどね」

後藤「左様でございましたか」

曾我「あいつは」

曾我、拳を握る。

曾我「ここを立て直す責任から逃げたんです」

後藤、立ち上がる。

後藤「お言葉を返すようですが」

曾我「何です」

後藤「先生が都会に出たのは20年も前では」

曾我「そうですけど」

後藤「その頃はまだ」

曾我、後藤に向きなおる。

曾我「でも帰ってこなかった！」

曾我、両拳を握る。

曾我「20年も帰ってこなかったんですよ」

曾我、身を震わせる。

後藤「邦明様、あなた本当は先生を」

曾我、ハッと目を見開いて後藤に背を

向ける。

曾我「あいつの味方をするならもう話すこと

はありません」

後藤「しかしまだ」

曾我「仕事がありますので」

曾我、牛舎内に向かう。

後藤、その背を見送る。

○里山・麓・キャンピングカー・外観

後藤、キャンピングカーに向かって歩

いていく。

○同・車内

守岡がパソコンの前に座っている。パ

ソコンの画面にはソーラーパネルの有
害性に関するネット記事が映っている。

後藤が守岡に向かって頭を下げている。

後藤「申し訳ございません」

守岡「まあ邦明を説得できなくても問題ない」

後藤、頭を上げる。

守岡「欲深い連中は懐柔できたし」

後藤「流石です」

守岡「しかしあいつ」

守岡、座席に寄りかかる。

守岡「本当に補助金で牧場を立て直す気だっ

たのか」

後藤「はい。どう思われますか？」

守岡、腕を組む。

守岡「無理だな」

後藤「やはりそうですか」

守岡「補助金程度じゃ焼け石に水だ」

後藤「ええ」

守岡「10年も延命出来たら御の字さ」

後藤「何とかかならないものでしょうか」

守岡「後藤ちゃん」

後藤「はい」

守岡「それを議論している場合じゃないよ」

後藤「しかし先生」

守岡「今はこの山を」

守岡、窓越しに里山を見る。

守岡「手に入れることだけを考えよう」

後藤、唾を飲み込む。

後藤「先生」

守岡「ん？」

後藤「会社を辞めた日のこと覚えてますか？」

守岡「なんだい藪から棒に」

後藤、守岡と見つめ合う。

守岡「忘れるわけないだろう」

守岡、後藤から視線を逸らす。

○（回想）マグナ製菓・外観

T・5年前。

都市部のオフィスビル。

○（回想）同・喫煙室・内

後藤（26）が短くなった煙草を吸っている。

守岡（26）が喫煙室に入ってくる。

守岡「後藤ちゃん」

後藤「守岡さん」

守岡、煙草を取り出す。

守岡「今から、退職届を出してくる」

後藤「えっ」

守岡「後藤ちゃんには世話になったから、報告しときたくてね」

守岡、煙草を吸い始める。

後藤「何もしてないですよ」

守岡、首を振る。

守岡「後藤ちゃんほど丁寧な事務員、俺は知らないね」

後藤の煙草が、加熱部が指にかかるほど短くなる。

後藤「僕はそんな、熱っ」

後藤、煙草を灰皿に捨てる。

守岡「1つ忠告しとく」

後藤「何ですか？」

守岡「後藤ちゃんも早く辞めた方がいい」

後藤「僕がですか？」

守岡「この会社じゃあ」

守岡、煙草を吸う。

守岡「君みたいに真面目な人は使い潰される」

後藤、俯く。

後藤「それでも仕方ないです」

守岡「なんだって？」

後藤「僕、守岡さんと違って無能なんで、他

じややってけないですよ」

守岡「後藤ちゃん」

後藤「じゃあ、これからの活躍応援してます」

後藤、喫煙室を出ようとする。

守岡「待ちなよ」

後藤、振り返る。

守岡「それでいいのかい、君の人生だろ」

後藤「会社辞めたら、親に心配かけます」

守岡「だからさ」

守岡、煙草を灰皿に捨てる。

守岡「君がどうしたいかを聞いてるんだ」

後藤「わからないです。考えたことないんで」

守岡「そんな」

後藤、守岡に背を向ける。

守岡、親指を側頭部にグリグリと押し

当てた後、後藤を無理矢理引き戻す。

守岡「君を俺の秘書にする」

後藤「ええ！？」

守岡「やってみて気に食わなかったら、煮るなり焼くなり」

守岡、煙草の箱を取り出す。

守岡「そうだな、生命保険でもかけたらいい」

後藤「ご冗談でしょう？」

守岡、箱から1本煙草を抜く。

守岡「本気だ。少なくとも覚悟の点ではね」

守岡、煙草を後藤に差し出す。

守岡「どうする？」

後藤「僕は」

守岡「自分を変えたいと思わないか？」

後藤、頷いて煙草を受け取る。

○元の車内

守岡がパソコンの前に座っている。パソコンの画面にはソーラーパネルの有害性に関するネット記事が映っている。

後藤が守岡の隣に座っている。

守岡「で、それがどうかしたのかい？」

後藤「僕はあの日の先生に」

地震が起こる。

後藤「先生！」

後藤、守岡を支える。

地震が収まる。

守岡「またか、最近多いな」

後藤「また？」

守岡「ほら、こないだ宮崎でも」

守岡、息を飲む。

守岡「サンプルは？」

後藤「はい？」

守岡「ニホンカワウソの細胞だ、停電でもし

てたら温度が」

後藤「事務所の様子はカメラで確認できます」

後藤、守岡と位置を入れ替えてパソコンを操作する。

守岡「非常電源もあるが万一」

パソコンに「No Signal」と表示され、

後藤が呻く。

後藤「カメラ、反応ありません」

守岡「いかん。大至急東京に戻って」

守岡のポケットでスマホが鳴る。

守岡「こんな時に」

守岡電話に出る。

守岡「何ですか？ええ？わかりました」

守岡、電話を切る。

守岡「伯父さんからだ、屋敷に戻れと」

後藤「どうしてまた急に」

守岡「婆さんの思い付きらしい、畜生」

守岡、親指を側頭部にグリグリと押し当てる。

守岡「後藤ちゃん」

後藤「はい！」

守岡「私はこっちに残る。事務所は頼んだ」

後藤「承知しました」

守岡、パソコンを持って車を降りる。

○曾我家・大広間・内（夕）

守岡の他、曾我、竹彦、梅子、氏松を
含む喪服を着た人々が座っている。

上座には国光とその妻および和子が座
っている。

和子は座椅子に腰かけている。

和子「皆々様」

和子、深々と頭を下げる。

和子「大変、申し訳ございません」

竹彦「母さん、どうしたんです」

和子「私は、嘘をついておりました」

和子、懐から遺言書を取り出す。

和子「あの人の、遺言書です」

一同、どよめく。

守岡「馬鹿な」

和子、遺言書を開く。

和子「遺産の配分について、ちゃあんと書かれとります」

守岡、立ち上がる。

守岡「何故黙ってたんだっ」

和子「これからのことは、若い人らが決めるのが一番とって」

守岡、親指を側頭部にグリグリと押し当て、首を振る。

和子「でも、そのせいで争いが起きてしまいました」

曾我、俯く。

和子「そしてさっきの地震」

和子、天を仰ぐ。

和子「きっと天国のあの人が、私を叱るために起こしたんでしょう」

和子、遺言書に目を落とす。

守岡「山は、山の処遇は？」

和子「あの山の所有権は」

和子、深く息を吸う。

和子「妻和子、私に任せると」

和子、曾我を見る。

曾我「婆ちゃん？」

和子「邦ちゃん」

曾我、おずおずと頷く。

和子「私は、邦ちゃんに、あの山をあげます」

曾我「本当に？」

和子、頷く。

守岡、身を震わせつつ深呼吸する。

守岡「そんな」

和子「ごめんねえ、秀ちゃん」

守岡「どうして」

和子、目を伏せる。

守岡「そんな。待ってくれ」

守岡、和子に向かっていこうとする。

守岡「山の自然が、爺ちゃんの山が」

梅子「あの」

参列者ら、梅子を見る。

梅子「山以外の、遺産のことは」

和子、何度も頷く。

和子「勿論、書いてありますよ」

参列者ら、どよめく。

守岡のポケットでスマホが鳴る。

守岡、スマホを取り出す。画面に「後藤智雄」と表示される。守岡、ふらふらと大広間の出口へ向かう。

和子、遺言書を国光に渡す。

国光「では、僭越ながら読み上げます」

守岡、力ない足取りで大広間を出る。

○同・外

守岡が扉の脇で立ち、スマホを耳に当てている。

守岡「後藤ちゃん、サンプルは？」

守岡、目元を押さえて力なく座り込む。

○里山・山道（夜）

守岡が山道を走っている。

○ 里山・中腹（夜）

洞窟があり、周囲には桔梗の花が咲いている。

荒い息の守岡が洞窟に向かってでふらふらと歩いている。

守岡、洞窟の入口に来たところで振り返り、あたりを見渡す。

○（イメージ）里山・中腹（夜）

桔梗の花畑と洞窟が埋め立てられ、代わりにソーラーパネルが設置される。

○元の里山・中腹（夜）

守岡が震えながら周囲を見ている。

雨が降り始める。

守岡、座り込んでえずく。

後藤の声「先生！」

守岡が振り向くと、後藤が近付いてきている。

後藤「大丈夫ですか？」

守岡「私は、失敗した」

守岡、髪の毛をグシヤツと掴む。

守岡「失敗したんだ、何もかも」

後藤「先生」

後藤、守岡の肩を抱く。

後藤「水辺は冷えます、場所を変えましょう」

後藤、守岡を支えて立たせる。

○同・山頂・テント・外（夜）

雨の中に小型のテントが立っている。

○同・内（夜）

電気式ランタンを囲んで守岡と後藤が座っている。

守岡「敵を見誤ったというべきかな」

後藤「敵？」

守岡「邦明を論破すればいいと思ってたが」

守岡、膝を抱える。

守岡「婆さんが思わぬ伏兵だった」

後藤「先生」

守岡、顔を上げて後藤を見る。

後藤「敵とか、そういうんじゃないでしょう」

守岡「どうということだい」

後藤「邦明様を論破するのではなく、話し合
うべきだったと僕は思うんです」

守岡「邦明が私を嫌っているのにかい」

後藤「逆ですよ」

守岡「逆？」

後藤「先生がいなくなって寂しかったんです

よ、邦明様は」

守岡「まさか」

後藤「信じられませんか？ 従弟のことが」

守岡、親指を側頭部にグリグリと押し
当てる。

守岡「ああ、信じられないさ」

後藤「そうですか」

守岡「他人なんて、信用できない」

後藤「だから、共同研究も断ったんですね」

守岡「今その話は関係ないだろう！」

後藤「共同研究だったら、地震くらいでサン

プルがダメになることはなかったでしょう」

守岡「さっきから何が言いたいんだ」

守岡、後藤に詰め寄る。

守岡「君らしくもない」

後藤「らしくないのは先生です」

守岡「何わかったようなこと言ってるんだ」

後藤「僕は知ってるんです！」

後藤、守岡に詰め寄る。

守岡、身を引く。

後藤「あの日、僕を連れ出してくれた」

守岡、呻く。

後藤「それが先生の本質でしょう？」

守岡、顔を背ける。

守岡「ただの気まぐれさ」

後藤「先生」

後藤、守岡の手を取る。

後藤「邦明様は、大丈夫です」

守岡、後藤と目を合わせる。

後藤「信じましょう」

守岡、目を伏せて後藤の手を見る。

○曾我家・邦明の部屋・内（夜）

曾我が布団で横になり、天井を見つめて
いる。

屋外から雨の音が聞こえてくる。

部屋の戸がノックされる。

曾我「はい」

曾我、布団から出て扉を開ける。

廊下に守岡が立っている。

曾我「秀一」

守岡、鼻で深く呼吸する。

曾我「こんな夜中に何の用だ」

守岡、徐々に膝をつけて土下座する。

曾我「なっ、何を」

守岡「お願いだ」

曾我「お願いだと？」

守岡「山はお前のものでいい。だから、自然
を壊すのはやめてくれ」

曾我「でも」

守岡「あの山は爺ちゃんを守ってくれたんだ」
曾我「やめろ！」

曾我、拳を握って守岡から目を逸らす。

曾我「俺は、牧場を守るんだ」

守岡、顔を上げる。

守岡「私がお前を支える」

曾我「えっ」

守岡「私がお前を支えると言ったんだ」

曾我、身を震わせる。

曾我「本気で言ってるのか？」

守岡「牧場のこと、お前にばかり背負わせて」

守岡、再び頭を下げる。

守岡「すまなかった」

曾我、膝をつく。

守岡「だから、一緒に山を、守ってくれ」

曾我、涙を流す。

守岡、床に涙粒が落ちるのを見て顔を上げる。

曾我「秀、兄」

守岡、曾我を抱きしめる。

守岡「また、秀兄と呼んでくれるのか」

曾我、頷く。

曾我「怖かった」

守岡、頷く。

曾我「俺の代で、牧場が」

守岡、曾我の頭に手を回す。

守岡「大丈夫だ。2人なら、大丈夫だ」

曾我、頷いて守岡を抱きしめ返す。

雨の音が止む。

○同・仏間・内（夜）

仏壇に栄次郎の遺影が飾られている。

守岡が仏壇の前で手を合わせている。

曾我、その後ろで座っている。

守岡「爺ちゃん、心配かけてごめん」

曾我、頷く。

曾我「ありがとう、秀兄」

守岡、首を振って振り返る。

守岡「だが、実際どうしたものかな」

曾我「牧場か？」

守岡、頷く。

守岡「収益を見たが酷いもんだ」

曾我、苦笑いする。

曾我「いっそ、秀兄の事務所にでもした方が
儲かるかもね」

守岡、苦笑いする。

守岡「診療所にしろ研究所にしろデカすぎ」

守岡、ハッと息を飲む。

守岡「いや、そうだ、だが時間もコストも」

曾我「秀兄」

守岡、曾我を見る。

曾我「何を思いついたか知らないけど」

曾我、守岡の方に進み出る。

曾我「抱え込むなよ、俺もいるんだぜ」

守岡「ああ！」

守岡、頷く。

○曾我牧場・全景（朝）

T・3年後。

桔梗の花が咲きこぼれる里山、その麓
にある牧場。

牧場の入口に「那須大学研究牧場オー

プニングセレモニー」と掛かれた垂れ幕がかかっている。

○同・事務所・外観（朝）

牧場内の小屋。

曾我の声「秀兄、早くしろよ」

○同・内（朝）

スーツ姿の曾我（32）が入口付近で腕時計を叩いている。

後藤（34）が守岡（34）のネクタイを着けている。

守岡「そう焦るな」

曾我「大学の先生来てるってよ」

守岡「先行っててくれ」

曾我「しょうがねえなあ」

曾我、室内を出ていく。

後藤「ようやく、この日が来ましたね」

守岡、椅子に座る。

守岡「ああ」

後藤、守岡の靴を磨き始める。

後藤「僕も感無量です」

守岡「気が早いよ、課題は山積みだ」

後藤「え？」

守岡「研究牧場として認められたとはいえ、

試運転に近い」

後藤「そうですね」

守岡「成果が上がらなきゃ切られる」

後藤「そうかもしれません」

守岡「私立はその辺シビアだからねえ」

後藤、口をつぐみ、力を込めて靴を磨く。

守岡、笑みを浮かべる。

守岡「全く、面倒なことになったもんだ」

後藤「先生、そんな」

後藤、顔を上げ、守岡の笑みを見ると、微笑んで靴磨きを再開する。

後藤「さ、できました」

守岡「ありがとう、後藤ちゃん」

後藤「ええ、では、行きましょう」

守岡、次いで後藤の順で室内を出る。

○同・外（朝）

守岡が里山とそこに咲く桔梗の花を眺めて目を細めている。

後藤が事務所の中から出てくる。

守岡「後藤ちゃん」

後藤「はい？」

守岡、後藤を振り返る。

守岡「まあその、なんだ」

後藤、首を傾げる。

守岡、後藤から顔を背ける。

守岡「これからも、よろしく」

後藤、笑う。

後藤「はい、先生！」

後藤、守岡の背中を叩く。

守岡「うおっぷ、後藤ちゃん力強いね」

守岡と後藤、笑いながら歩き出す。